

現代日本
文學全集

[39]

社會文學集



社會文學集

改
造
社
版

杉浦非水裝幀

昭和五年九月十七日印刷
昭和五年九月二十日發行

現代日本文學全集 第三十九篇

編纂者 山本三生

發行者 山本美

印刷者 杉山愛二



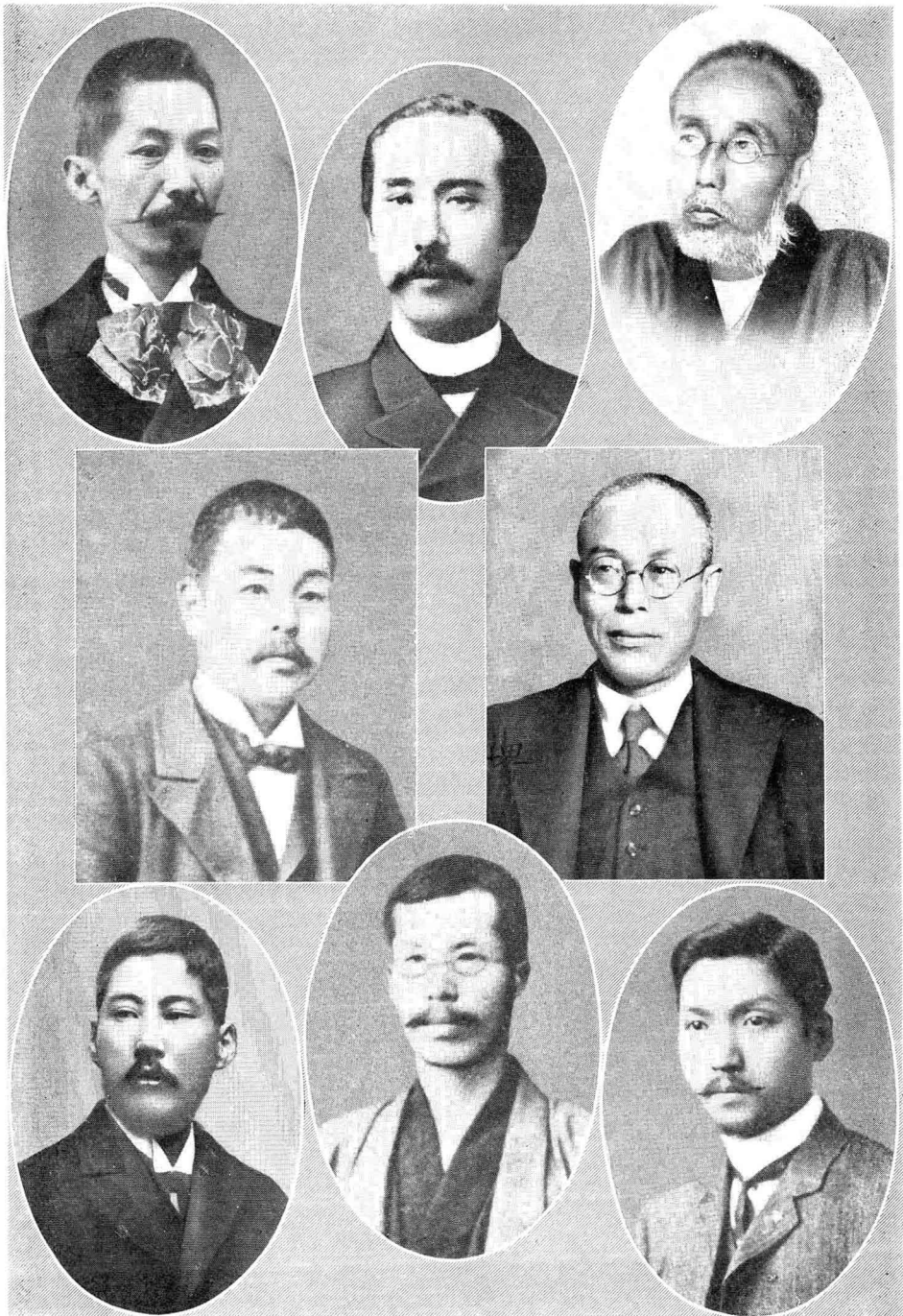
發兌

東京市芝區愛宕下町
四丁目四〇番地

改 造 社

振替東京八四〇
電話芝(43)
二二三二〇
四三二一二
番番番番番

東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二



(同段中 井酒・野矢・江中りよ右てつ向段上 影照家諸
 氏諸の徳幸・卜木・杉人同段下 部安・塚)

「社會文學集」目次

卷頭寫眞 (諸家 撮影)

序 二

中江兆民篇

一 年 有 半 四

酒井雄三郎篇

「クレー、デー、ター」及「安」 四

社會問題

社會黨の運動

五月一日の社會黨運動會に就て

五月一日及び總學同盟罷工

「社會問題」と「近世文明」との關繫に就て

矢野龍溪篇

新社會

安部磯雄篇

地上の理想國瑞西

第一編 政治 一六

第二編 教育 三〇

第三編 社會問題 四五

結論 六六

幸徳秋水篇

社會主義神髓

自由黨を祭る文

平凡の巨人

理想なき國民

義務の念

排斥行論

婦人問題の解釋

ドレフコー大疑獄とエミール・ゾラ

トルストイ翁の非戰論を評す

白 殺 論

修身要領を讀む

論文の三要件

翻譯の苦心

女士としての兆民先生

綠雨に就て

人 物

漢 手 詩

纂(上)

纂(中)

纂(下)

塚利彦篇

櫻 桃 傳

第一期 豐津時代(上) 二二六

第二期 豐津時代(下) 二二七

第三期 東京學生時代 二二八

第四期 大阪時代(上) 二二九

第五期 大阪時代(下) 二三〇

第六期 福岡時代 二三一

第七期 毛利家編輯時代 二三二

木下尚江篇

火 の 柱

大杉榮篇

自 敘 傳

最初の思出 四三六

少年時代 四三七

不良少年 四三八

幼年學校時代 四三九

新生生活 四四〇

母の憶出 四四一

獄中生活 四四二

藝山事件 四四三

日本脫出記

諸家略年譜

日本脫出記 四四四

諸家略年譜 四四五

序

歐洲社會運動の實狀は既に幕末の渡歐者の日記にも散見し、その斷片的な紹介は明治初期の諸論文の中にも拾へる。併しその意義を把握し始めて來たのは、明治も十年を過ぎてからであつた。

當時この方面を刺戟した外來思想は、大凡四様に分つて見る事が出来る。曰く三田を中心とする英國流の功利的經濟說、曰く東京大學を中心とする獨逸流の國權說、曰く佛學黨を中心とする佛國流の民約說、曰く同志社及び札幌農學校を中心とする米國流の基督教。この中後年の日本社會問題誘導の中心主體となつたのは、後の二者である。

兆民中江篤介氏がルツソオの民約譯解を發表して自由民權論に指導理論を與へたことは、明治政治上に於ける輝かしき功績であると共に、我國社會運動黎明期に於ける先覺的功業であつたと云へよう。その『二年有半』は自ら『生前の遺著』を以て評した居士の思想的、文筆的の總決算であり、當時洛陽の紙價爲に貴きを致した不朽の名篇である。

兆民門下の逸足として、先には佛學塾出身

の酒井雄三郎氏があり、後に秋水、徳傳次郎氏がある。前者は歴史的な第一回、メ、デイの實狀通報者として、又最初のインタナショナルの出席者として、更に又マルクス主義指導下の歐洲諸運動の觀察家として、我國社會思想上に稀有の文獻を遺した點に於て光彩著しく、後者は明治三十四年に於ける社會民主黨の創立者の一人であり、『平民新聞』の創刊者であり、共產黨宣言の翻譯者であつて、最後に大逆事件に連坐した。

米國流の基督教より轉じた先達の一人に安部磯雄氏がある。現在社會民衆黨の黨主である。安部氏が無產政黨運動への嚮導は一日のものでなく、前述三十四年の社會民主黨設立の際に於ては、實にその指導者であり、その宣言書の起草者であつて、或る新聞が『個人にして即ち吾邦無產政黨の全歴史』と言つたのは、蓋し適評であらう。『地上の理想國瑞西』は氏の自選にか

かるもの、一篇以て氏の思想の全幅を窺ふことが出来る。『地下の理想國瑞西』は氏の自選にか

が出来る。木下尚江氏また當時に於ける基督教、色彩の著しき一人であつた。熱烈の辯、銳利の筆、而も氏を最も特色づけたものは、續々として刊行せられたその小説で、『火の柱』は實にその

先頭を切つたもの。この一篇こそ、現代社會小説の父と云ふべきであらう。

堺利彦氏の枯川の號は、『平民新聞』創刊の頃より社會運動界に光を放つものがあつた。本集載するところの『堺利彦傳』は、小説に隨筆に評論に、之くとして可ならざるなき練達のべを以て自ら描かれた氏の前半生、即ち、氏が全國大衆黨の顧問たる現時を生むに至つた母胎の解剖である點に於て、正に我が社會文學史上逸すべからざる記録である。

これと一對をなすものは、大杉榮氏の『自敘傳』である。その思想その行動は、自ら語るに任すべきで、敢て吾等の喋々を俟たぬ。その最期に就いては茲に書く限りでない。

矢野龍溪氏に至つては、雑多の經歷を持つところ、自ら上記諸家とその撰を異にするものがある。併しながら、その『新社會』一篇は明治時代の産んだ最も傑出せるユトローピアとして看過するを許さぬであらう。

觀じれば過去に於ける吾邦社會文學中の重要なものはほゞこの中に結晶してゐると信ずる。一卷よく明治大正文學史上の好文獻たるを得ば我等が願ひは足る。

昭和五年八月

一^し
年^{ねん}
有^{ゆう}
半^{はん}

中
江
兆
民

一 年 有 半

『生前の遺稿』

第四版小引

一、九月七日兆民先生塚を發し、三泊して京に歸る、予匆惶新橋に迎へ、諷す、先生橋腰頗る脹起し、聲音全く嘎れて又言ふ能はず、知る可し病勢の更に大に進めることを、此時悲傷何ぞ堪へん一、幾もなくして本書第二版、第三版を重ねるを告げ、今や第四版の成るに遭ふ、江湖の愛讀如此きは近來の罕なる所、洵と心に歡喜するに足るべし、但だ此歡喜は能く彼悲傷の萬一をだも慰するを得べき乎

る、豈に已むを得んや、本書前版に比して増減する所なし、唯だ先生最近の影照一葉と加ふ(本書には、此れ八月二十五日塚に於て、大阪の寫眞師花淵正美君の撮寫する所

明治三十四年九月十四日

幸徳生 謹誌

引

一、兆民先生病で泉州塚に在り、余を召して至らしむ、八月四日往て候す、先生數帖の草稿を蒲團の下に取り、莞爾として余に謂て曰く、我病聲日に悪し、意ふに餘命幾何もなけん、若し今にして一言の後人に告ぐる有るにあらざんば、豈に讀書の人たるに在らん哉、故に頭來筆を授て此稿を成せり、我瞑目の後、汝宜しく校訂して以て公にす可しと、余之

を聽き黯然として答ふる所を知らず、既にして曰く、不敏謹んで命を領す、然れども、之を出して世に問ふ、生前と死後と先生に於て何の擇ぶ所ぞ、天下先生の文を想ふ渴するが如し、請ふ直ちに之を刻するを許せと、先生啗うて甚だ拒まず、曰ふ、惟汝善く之を圖れと、翌此稿を携へて京に歸り、同門の先輩小山久之助君に託る、小山君亦大に余の意を贊す、乃ち大橋新太郎君に託して之を割刷に附するを爲せり、一年有半即是なり、夫れ唯だ數年の後にす可くして、而して數年前に於てする、想ふに先生之を以て深く余等を罪せざるべし

一、本書每節附する所の目次は、先生、余に命じて作らしむる所也、深く恐る、蛇足狗尾、編中の趣旨と相副ふを得ずして、而して先生の意に満たざる者多からんことを(本書には謹願は之す)

一、先生政界を辭して後、多く筆硯と親しまず、唯だ明治三十一年一月より四月に至るの間、雜誌「百零一」に掲ぐる所の論文四篇、及び明治三十三年十月より本年三月に至るの間、毎夕新聞に寄する所の

論文數十篇あり、今其散帙を恐れて、之を巻末に輯録せり(本書に在り)、其剪裁次序の如きは、實一に不才に在り

一、先生の小照、甚だ多からず、家に存する所、皆な壯時の物にして、本書挿む所は其一也(之を缺は、善し佛國留學中の撮影に係る)

明治三十四年八月十八日

門生 幸徳秋水 拜識

目次

第一

一年半の來由……………	七
壽命の豐年……………	七
一年半は悠久也……………	七
世界との交際……………	七
超然の怪物強寇して笑ふ……………	七
コルベールの時代……………	八
マンチエニター涙の賜……………	八
國民何くに適歸せん……………	八
越路大夫を驅く……………	八
戯曲界の一偉觀……………	八
氣管切開の一法あるのみ……………	八
果然不具善と成る……………	九

聊か哲理的工夫を要す……………	九
温泉湯場の出養生……………	九
岡平と大隅大夫……………	九
大隅大夫の壺坂……………	九
技此に至りて神なり……………	一〇
星亨と伊庭想太郎……………	一〇
暗殺は必要なり……………	一〇
灰發連の欺儂……………	一〇
篤彦は吳服屋の帳面に非ず……………	一〇
井上、白根今期も亡し……………	一〇
ロベエスピエル現出せんとす……………	一〇
日本に哲なし……………	一一
纏ての病根此に在り……………	一一
經國の二大方針……………	一一
世界のルーマニヤ……………	一一
堺市に移る……………	一一
政友會の運命……………	一一
伊藤侯は下手の魚釣り……………	一一
早稲田伯愛す可し……………	一一
餘の元老筆を汗すに足らず……………	一一
自由黨の大度量……………	一一
進歩黨の立後れ……………	一一
宣言實行は釋迦孔子以上の仕事……………	一一
感くは其人なし……………	一一
玉造と紋十郎の形容……………	一一
文樂の三絶……………	一一
津太夫……………	一一
魔助、吉兵衛……………	一一
瀧寺の風景……………	一一
欲横澤繁惟殊狂、自笑狂夫老更狂……………	一一
自殺論……………	一一

第二

死後は水劫也……………	一四
莊周も未だ言ひ得ず……………	一四
權略は悪字面に非ず……………	一四
大政事家は誰ぞ……………	一四
大政事家の爲す所……………	一四
大政事家は眞面目也……………	一四
稅販零商の徒……………	一四
製造難……………	一四
輸出難……………	一四
百年の計別に在る有り……………	一五
何ぞ墮落を怪まん……………	一五
文學の戰國時代……………	一五
邦人は二様の生活を爲す……………	一五
焼て粉にして吹散らせ……………	一五
蕪、醜相、風角、厚祝……………	一六
蕪妓放つ可し……………	一六
天下、娼妓より必要なるはなし……………	一六
病の一年半と日記の一年半……………	一六
小山久之助君……………	一六
舊門人二十餘人……………	一七
堺市寓居の庭園……………	一七
余が郷里に松魚有り……………	一七
余が郷里に楊梅有り……………	一七
迂なる哉公債賣出……………	一七
斯民に訴へんのみ……………	一七
繁文の地何ぞ限らん……………	一八
繁文の發生する所以……………	一八
官とは何ぞ……………	一八
民權自由は歐米の專有に非ず……………	一八

未之有也……………	六
考へることの嫌ひな國民……………	六
故井上毅君……………	六
首尾能く出来たり今日の腐敗社會……………	六
政治の自由と經濟の自由は別物也……………	六
干渉保護豈已む可けん哉……………	六
讃岐の砂糖と土佐抄紙……………	六
工業四種に大別す……………	六
農務……………	六
水産……………	六
鱗界の王公……………	六
羊と家……………	六
美なる哉一幅活畫圖……………	六
服裝改良論……………	六
文學としての謡曲……………	六
露伴、紅葉、逍遙、鷗外……………	六
日本文章の第一等……………	六
世界文章中小品の又小品……………	六
翻譯は思軒と派香……………	六
講談落語の名文……………	六
日本の演説……………	六
俗曲俚歌……………	六
議論時文の最なる者五人……………	六
近時漢語の杜撰……………	六
歐洲人の文章……………	六
檣壁の落書……………	六
婦人の待遇……………	六
窮屈は大嫌ひ……………	六
諸種の禮式……………	六
時間の約束……………	六
晏子御者の集會……………	六

官吏の安心……………	三
學士博士に好著なし……………	三
是れ亡國の基……………	三
洋々大國の風……………	三
第三	
獨英の商工業……………	三
井上甚太郎君……………	三
政友會中一人有る乎……………	三
議員政事家てふ賊人鬼……………	三
國家は兎も角も大物也……………	三
改革の兆朕既に發せり……………	三
疾の一年半は迫る愈と急……………	三
社會の悶死を被れり……………	三
攻撃の筆死すれども休まず……………	三
兆民居士は學者也……………	三
書篋中の舊知……………	三
讀山民の詩……………	三
文人の苦心唯此一事……………	三
高青邱……………	三
漢詩革新の一法……………	三
魏南先生の詩學……………	三
故岡松幾谷先生……………	三
山陽履軒躑足のみ……………	三
剛毅なる哉……………	三
今の雷權太夫……………	三
此れ或は不公平……………	三
近代非凡人三十一人……………	三
西園寺侯……………	三
近衛公……………	三
黒田侯……………	三

犬養木堂君……………	三
大石正巳君……………	三
尾崎學堂君……………	三
田口卯吉君……………	三
島田三郎君……………	三
佐々友房君……………	三
頭山滿君……………	三
坂本金彌君……………	三
加藤高明君、山本權兵衛君……………	三
故藤田伯少しく人に出乎……………	三
恐外病と侮外病……………	三
日本人は蟲持の小兒……………	三
パークスと大久保公……………	三
灰敷著流客隊の權なし……………	三
物質の美と愛國心……………	三
理化の應用……………	三
未來の大發明……………	三
巴里倫敦の愛國心……………	三
外務内務は邪家の大患……………	三
洋妾と灰敷……………	三
今の外交官……………	三
國民墮落の歴史……………	三
此外別に名策なし……………	三
萬朝報の理想圖……………	三
石碑の後より諸君を祝せん……………	三
生ける蠟人形の放逐……………	三
カフェー・アングレーの糞汁よりも美し……………	三
余に於て足れり……………	三
徳孤ならず……………	三
兆民居士不遇に非ず……………	三

第一

○明治三十四年三月二十二日東京出發、翌二十三日大阪に着したり、二三友人停車場に來り迎へ、余が顔を熱視し大に驚きて、余が或は直に卒倒せざるやと遂に思ひたると、旅館に着したる後に言へり、宜なり余は去年十一月より頻に咳嗽を患ひ、當時咽喉専門の醫の診斷には、普通の喉頭加答兒なる旨に付き、爾來打棄置きたるに喉頭漸く疼痛を覺え、飲食共に半減せる中、夜汽車にて來りしが故に、斯くは疲勞を現したるなる可し、然れども此時余は矢張慢性喉頭加答兒位に考へて打棄置き、四月紀州和歌の浦に赴き遊ぶこと四五日、然るに此時よりソロソロ呼吸微促を覺え、喉痛依然たるを以て、余の素人と雖も少く氣を遣ひ、或は世に所謂萬應なる者に非ざる耶と、因て行李匆々大阪に歸り、耳鼻咽喉専門醫堀内某の診斷を請へり、醫例に依り光線を利用して、仔細檢視して曰く、是れ切開を要すと、余是に於て果して痛腫なりと察し、答て曰く、然らば請ふ一身を託して切開を施されんことを、既にして余の友人余の請によりて手術の證人たるを諾せし者、書面を余の留守許に發し詳細の事を告げり、

妻彌大に驚き倉皇出發して下阪し來り、余の投宿せる中の鳥小塚に至れり、既にして業皆痛痺切開の極めて危険にして、九死中一生無し、寧ろ維持策を取るに如かざるを謂ひ、余を尼めて已まず、余固より好みて死を速にせんと欲するに非ず、一息の存する必ず爲す可き有り、亦樂む可き有るを知るが故に、痛腫切開の方は思ひ止まれり、而して堀内も敢て強ひず、矢張危険と考へたりと見ゆ

○余一日堀内を訪ひ、豫め諱むこと無く明言し呉れんことを請ひ、因て是より愈々臨終に至る迄猶ほ幾何日月有る可きを問ふ、即ち此間に爲す可き事と又樂む可き事と有るが故に、一日たりと多く利用せんと欲するが故に、斯く問うて今後の心得を爲さんと思へり、堀内醫は極めて無害の長者なり、沈思三分にして極めて言ひ悪きうに曰く一年半、善く養生すれば二年を保す可しと、余曰く余は高々五六ヶ月ならんと思ひしに、一年とは余の爲めには壽命の豊年なりと、此書題して一年有半と曰ふは是れが爲め也

○一年半、諸君は短促なりと曰はん、余は極めて悠久なりと曰ふ、若し短と曰はんは欲せば、十年も短なり、五十年も短なり、百年も短なり、

夫れ生時限り有りて死後限り無し、限り有るを以て限り無きに比す短には非ざる也、始より無き也、若し爲す有りて且つ樂むに於ては、一年半是れ優に利用するに足らずや、嗚呼所謂一年半も無也、五十年百年も無也、即ち我儕は是れ、虚無海上の一虚舟

○斯く一年半で、死刑の宣告を受けて以來、余の日々樂とする所は何事ぞ、旅の身なれば書籍とても無く、先づ差當り當地の朝日、毎日新聞と豫て愛讀し來れる、東京の萬朝報とを讀む事也、即ち此三新聞に由りて余の世界との交際を繼續する事也、此間伊藤内閣倒れて、桂内閣之れに紹で興れり、極て微弱なる立憲内閣、否立憲内閣の幻影消散して、超然内閣勃興せり、桂内閣なる者は其成立したる丈けにて世の立憲政治家に向うての、宣戰布告と謂ふ可し

○星亨、健在なりや、大養毅、健在なりや、民間政治家一たび利を目的とし、權勢を目的とし、成效を目的とせし以來は彼れ超然の怪物相共に、冠を彈して笑うて曰く、民間黨興るゝに足らず

○伊藤大隈のリヴァリターの時代は去りて、伊藤山縣のリヴァリター時代と成れり、民間意氣

の銷沈實に是に至る、而して其原因は財無きに苦むに在り、余故に曰く、今の日本はコルベールの時代也

○余是迄新聞に雜誌に時々曰へり、「マンチエスター」派經濟論は我日本官民上下を毒せしこと久し、即ち自由放任の經濟主義明治政府と共に發展して其力を逞しくし、今や經濟界の附屬品たる交通運輸の機關は日々に具備して、而して此等機關を利用す可き主要品たる産物は、三十餘年以來幾何の増殖を見ず、車輛有りて積貨無し、是れ我邦今日の經濟界也、是れマンチエスター派經濟論の賜也

○官民上下貧に苦しむ、是に於て乎凡そ施爲皆始息是れ事とし、人情日々に菲薄にして、内閣は復た一國經綸の造出所には非ずして、箇々利慾を貪り權勢を弄ぶ最高等最便利の階段也、貴族院は陽に黨弊を矯正すると稱し、陰に機に乗じ己れ自ら内閣に割込む地を爲さんとして、強て攻撃を粧ふ險惡極まる物體の集合所也、衆議院とは何ぞ、是れ復た言ふに及ばず直に是れ餓虎の一團體なるのみ、夫れ一國政治の機關たる内閣、貴族院、衆議院の各團體にして、蕪紳の野獸の淵藪なるに於ては、國民果して誰に適歸せん、コルベール出でて縱橫裁割大に利源を

開發し、官民上下をして財に饑ならしむるか、若くは自然の運移よりして此處猶尙多き年所を経て、コルベール大力量の效と同じき效を見るに至るに非ざれば、我日本の政治經濟は竟に觀るに足らざる也

○是より先余の大阪に来るや、曾て文樂座義太夫の極て面白きことを識りたるを以て、(余は春太夫朝太夫を記憶せり)旅館主人を拉して文樂座に至る、越路太夫の合邦ヶ辻呼物にて、其音聲の玲瓏、曲調の優美、桐竹、吉田の人形操の巧なる、遠く余が十數年前に聞きし所に勝ること萬々、余素より義太夫を好む、然れども殊に大阪のもの好む、東京のもの好まず、東京の義太夫は大阪のものに比すれば一兒戯に値せざる也、其後又越路の天神記中寺子屋の段を聞き、忠臣藏七段に於て呂太夫平右衛門を代表し、津太夫由良之助を代表し、越路太夫於輕を代表して、所謂掛合ひに語り、更に越路太夫が九段目の於石となせの取遣りを語るを聞き、又明樂座に於て大隅太夫の千本櫻解屋の段を聞けり、夫れより四月二十日に妻來れるを以て復た其に文樂座に起き、其後幾くも無くして又赴けり、故に此忠臣藏の淨瑠璃は妻は二度聞き、余は三度聽きて甞に厭はざるのみならず、

愈々聽きて愈々面白味を感じ、巧なる證據なり、蓋し津太夫の狀貌並に其沈寂の音聲、重くるしき洒落等、正に千五百石赤穂城代たる大石内藏之助其人を想はしむ、呂太夫の善く關東音を遣ひ、率直にして勇み膚なる、即ち平右衛門其人也、若夫れ越路の優美なる音聲と婀娜なる曲調とに至ては、於輕を模寫する誰れか之に近似し得る者ぞ、眞に是れ戯曲界の一偉觀と謂ふ可し、余既に三たび此偉觀に接す、一年半決して促には非ざる也、孔聖云はずや朝に道を聞て夕に死すとも可也

○然りと雖も所謂一年半も亦徐々歩を移し來れり、若し一步も進むこと無ければ一年半に非ずして不老不死なるを得ん、即ち余は喉頭の腫物漸次發達して大に呼吸の促進を起し來り夜間安眠すること能はず、乃ち堀内醫師に謀る、此時余は妻及び友人の勸誘に由り、一たび東京に歸り更に下阪せんかと思へり、堀内一診して曰く、是れ危險極まれり、若し此儘にて汽車に御せば途中必ず窒息す可し、之を防ぐには氣管切開の一法有るのみ、此れ極て見易き手術にて、氣管恰好の處に穴を穿ち、更に銀管を挿入し、以て呼吸に備ふる法也と、妻獨疑懼して決せず、急に電信もて余の從弟醫博士淺川純彦を

呼びこれに謀る、崎彦固より堀内と同一なり、更に當地傳染病研究所長石神某と共に立合人となり、五月二十六日を以て堀内醫院に於て切開を施し了りて、其前方なる淺尾某の一室を借りて療養を加ふる事と爲せり

○淺尾の家は今橋一丁目にて東溝堀に面し、右に高麗橋有り左に築地橋有り、更に前方即ち東方に天神橋屹然として起り、夜間兩岸の燈火水に映じて恍として純然たる水郭に居るの想有らしむ、是に於て毎日堀内院長來診して創口を療し、余は平臥動く無く以て醫命に従へり、夫れ氣管切開術、小手術なるには相違なきも手術は手術にして、其初や相當疼痛を覺え、而して今後咳嗽する毎に、痰口より出でずして胸より出づ、而して聲音全く啞濁して些の反響なく、僅に近接して談話を便するのみ、果然余は一種の不具者と成り了れり、而して是れ根本的治療には非ずして唯夫の一年半を迎ふる間、窒息して死するを豫防するに過ぎざるのみ

○氣管切開の事、京阪間に傳へられてより、書翰日々輻湊して手術後経過の状を問ひ來るものには、余妻をして經過極て良好なりと報ぜしむ、而して世人多くは癌腫に於ける氣管切

開の何物たるを省せず、直ちに認めて根本的切開と爲し、更に書を發して大に祝賀し來る者比々皆是れ也、所謂一年半は唯だ余と妻と之を知るのみ、即ち東京來書中二兒の葉書若くは封書有り、云ふ、父上御病氣追々快復云々と、此處父親たる余に於て聊かストイツクの哲學の工夫を把り來りて、自ら防がざる可らず、人間も亦愚癡なる動物なる哉 呵々

○余が妻は、余が豫め思ひしよりは意外に哲學的に、夫の一年半に於て絶て苦情を言はず、全然余の旨趣を探り務めて目前を樂しみ、以て自ら慰藉せしと見え、今此病院に居るも、何と無く陽氣にて宛然温泉場に出養生しつゝ有るが如く、うつら／＼目を送り其中創口も全く癒着し唯だ咳嗽未だ去らざるのみ、因て六月十八日出院して再び中の鳥小塚旅館に歸れり

○是より先、未だ入院せざる前、余妻を携へて堀江なる明樂座に往き大隅大夫の淨瑠璃を聴く、妻が大隅を聴く是れを始めとす、大隅は名入故春大夫の弟子にして春大夫歿後之れが三絃を任し居たる古今無雙と稱せられし豊澤團平に従ひ、同人に其神品とも云ふ可き三絃を以て引廻され、自然に故春大夫の音節の蘊奥を極むることを得たりと云ふ、殊に近頃流行の壺坂寺の

如きは團平實に開山にして、之を大隅に傳へたるが故に、殆ど今日に在りて大隅大夫の事實とも云ふ可し、余出院して小塚へ歸るや、明樂座の三十三所の題目を掲げ、壺坂寺の段は大隅大夫之れを語ることと成り、毎日大入なりと聞けり

○斯くの如くに壺坂寺の段は、大隅大夫の十八番とも云ふ可き者にて、爲めに大入を占むる、是非一往せざる可らず、乃ち一日妻と共に往けり、夫れ明樂座は人形と云ひ、人形遣と云ひ、到底文樂座の巧妙に及ばず、其他道具と云ひ總て及ばず、然るに午後二時三時の比より客衆續々詰懸け來り、遂に場内立錫の地を留めざる者は、此輩全く其以前の大夫を眼底に置かず、唯大隅一人を聞くが爲めに斯くは雑踏し來る也、此れを以て言へば大隅一人にて優に文樂座の向を張り居れると謂ふ可し

○三十三所靈驗、順次段を逐て了れり、竟に壺坂寺の段に至れり、序幕は春子太太影にて語り去り、既にして大隅大夫其相撰然たる肥大の體を掲げ來り、やがて彼の有名な法師歌夢が浮世か浮世が夢か一を唄ひ出し、巽々絶えんと欲して絶えず、其澤市と里との嘶の如き直ちに其人を現出したる如く、此間に大隅大夫無き也、

○氣管切開の事、京阪間に傳へられてより、書翰日々輻湊して手術後経過の状を問ひ來るものには、余妻をして經過極て良好なりと報ぜしむ、而して世人多くは癌腫に於ける氣管切

嗚呼技此に至りて神なり、是れ淨瑠璃か、是れ嘯耶、是れ活劇耶、他人の淨瑠璃は淨瑠璃なり、大隅の淨瑠璃は事實其物也、且つ彼れは故さらに拍手喝采を博せんと欲するが如き態絶て無く、唯自ら語り自ら研究して、自ら満足し自ら樂むが如き所、眞に高尚上品にして、到底他碌々たる者と比す可きに非ず、嗚呼是れ斯道の聖也

○六月二十一日夜、朝日新聞號外の摺物を送り來る、曰く、本日本午後三時、星亨東京市會に於て伊庭某の爲め刺されて即死せりと、余も亦驚きたり、是より二十六日葬儀を畢るに至る迄、京阪新聞、毎日一二欄星暗殺事件の詳を載せざる莫し、所謂一國如狂もの耶、何ぞ我邦人の輕浮にして沈重の態に乏しき耶、生ける星は追刺盜賊にして、死せる星は偉人傑士なり、是非毀譽の常無き一に此に至る、伊庭某余一面の識有り、名を想太郎と云ふ、極て濃厚沈重の人也、而して此舉に出づ、謂はれ無しと曰ふ可らず、但暗殺其事の善か悪か是れ言ふ迄も無し、刑法人を殺す猶ほ大に諫す可き有りて、死刑を廢するの論各國に行はるゝ所以なり、況や人々相殺すに於てをや

○是故に暗殺は其是非を論ず可きに非ずして、唯其國社會に於て果して暗殺の必要を生じたること、是れ甚哀しむ可き也、人或は勢に乗じて鳴張して忌憚する所無し、其惡を恣にする可き明かなるも、法律の公に於て未だ把捉す可らず、彼れや自ら恃みて毫も顧みず、是に於て義に激する俠雄の徒起ちて天下の爲めに之を刺す、是れ洵に勢已むを得ざる也、伊庭の事、蓋し斯く信じたるのみ、此を以て更に一步を進めて之を論ぜば、文運大に開け法律用無くして、道德獨り力を逞しくして、乃ち一國人々皆君子なる曉は知らず、苟も社會の制裁力微弱なる時代に在ては、惡を懲らし禍を塞ぐに於て、暗殺蓋し必要缺く可らずと謂ふ可き耶

○世には又一種の灰殻連と云ふ可き輩は、己れ文明人たる事を示さんと欲し、無暗に同情を被害者に表し、意を枉げて褒贊媚悅し、加害者は則ち直ちに兇漢を以て之を目して、以て自家の文明溫和の人たるを銜耀し、其衷情を問へば或は正に之れと反對にて、心竊に此事件を快とせる者多々なるを知る、欺偽の世の中なる哉、教育の如きは要當に根本より革む可き也

○六月二十九日、東京文部省にて、法理醫文諸科に於て博士號を授かりし者三十許名、余の從弟淺川錦彦も亦醫學博士の號を授く、錦彦篤學業に絶す、北里後藤諸醫伯風に漢鑿する所有り、其初て笈を負うて東京に來るや、余が家に寓すること數月、余之れに謂て曰く、大丈夫既に一科の學に従事す、必ず二創見する所有り、以て其社會及び後世に賜資する有る可し、ニュートンの引力に於ける、ラウオアジェーの酸素に於ける、正に赫々人耳目を照す者也、然らずして唯書物にて學びたるのみにて、其頭腦中唯古人の言語を記憶するに過ぎざれば、吳服屋の帳面と一般ならん、何の學士か之れ有らん、何の博士か之れ有らん、大丈夫一たび此地球上に生る、必ず之れに一大爪痕を印す可きのみと、錦彦深く以て然りと爲す、今回博士の學位を得たるは、正に細菌學に就て大に創見せし所有りしが爲め也、果然錦彦は吳服屋の帳面に非ず、呵、

○夫れ其能く創見する所有るを得るは何ぞ、其人學術業に拔く有るに由ると雖も、抑も亦眞面目なるに由らざらんばあらず、彼れニュートンや、ラウオアジェーや、極めて正經の人も、極めて眞面目の人も、人或はニュートンに問ふに、何を以て能く爾かく大發見を得たると、ニュートン答て曰く、我唯思うて已ます

故に得たり、其心胸面目如何なる人たるを知らず可きに非ずや、是れ小才識小學術有りて、俗に所謂横着なる、俗に所謂ヅウ／＼しき小人輩の企及す可き所ならん哉、今や我邦中産以上の人物は、皆横着の標本也、ヅウ／＼しき小人の模範也、余近時に於て眞面目なる人物、横着ならざる人物、ヅウ／＼しからざる人物唯兩人を見たり、曰く井上毅、曰く白根專一、今や則ち亡し

○古今東西の歴史を看よ、興國の人は皆眞面目也、衰國の人は皆不眞面目也、希臘羅馬の末年に論勿く、即ち一千七百八十年佛蘭西革命前を看よ、如何に人々不眞面目なりしか、朝野の一出來事や、一戰役や皆被らずに綽名を以てして、以て之を詬罵せざるなし、横流の極、遂に天下古今の最も悲惨なる、最も滑稽なるロベスピエール輩を出して、此不眞面目なる一輩の徒を掩殺し盡して已めり、人事的論理の違はざる、此に至りて實に畏る可し

○我日本自古より今に至る迄哲學無し、本居平田の徒は古陵を探り、古辭を修むる一種の考古家に過ぎず、天地性命の理に至ては嘗焉たり、仁齋徂徠の徒、經說に就き新意を出せしことあるも、要、經學者たるのみ、唯佛敎僧中創意を

發して、開山作佛の功を遂げたるもの無きに非ざるも、是れ終に宗教家範圍の事に於て、純然たる哲學に非ず、近日は加藤某、井上某、自ら標榜して哲學家と爲し、世人も亦或は之を許すと雖も、其實は已れが學習せし所の泰西某々の論說を其儘に輸入し、所謂昆崙に箇の糞を存めるもの、哲學者と稱するに足らず、夫れ哲學の效未だ必ずしも人耳目に較著なるものに非ず、即ち貿易の順逆、金融の緩慢、工商業の振不振等、哲學に於て何の關係無きに似たるも、抑も國に哲學無き、恰も床の間に懸物無きが如く、其國の品位を劣にするは免る可らず、カントやデカルトや實に獨佛の誇也、二國床の間の懸物也、二國人民の品位に於て自ら關係無きを得ず、是れ閑是非にして閑是非に非ず、哲學無き人民は、何事を爲すも深遠の意無くして、淺薄を免れず

○我邦人之を海外諸國に視るに、極めて事理に明に、善く時の必要に従ひ推移して、絶て頑固の態無し、是れ我歴史に西洋諸國の如く、悲惨にして愚冥なる宗教の争ひ無き所以也、明治中興の業、殆ど刃に剉らずして成り、三百諸侯先を争うて、土地政權を納し還疑せざる所以也、舊來の風習を一變して之を洋風に改めて、

絶て顧藉せざる所以也、而して其浮躁輕薄の大病根も、亦正に此に在り、其獨造の哲學無く、政治に於て主義無く、黨争に於て繼續無き、其因實に此に在り、此れ一種小伶俐、小智知にして、而して偉業を建立するに不適當なる所以也、極めて常識に富める民也、常識以上に提出することとは到底望む可らざる也、或かに教育の根本を改革して、死學者よりも活人民を打出するに務むるを要するは、此れが爲めのみ

○今の日本を大體此儘に成し置き、漸次改正を加へて進み將ち往く可き耶、將た亟かに大革命をして一の歐羅巴國と爲す可き耶、是れ今日國柄を乘る者の最も首に胸中に決せざる可らざる事也、是れ豫算に苦しみ、對議會に窘しみ、閣僚の統一に盡瘁して、其他一步も餘地を留めざる底の侯伯君流に在て、到底夢想し能はざる所也

○東洋大陸の事は余之を言ふを欲せず、事外交に涉り且つ日下に在るを以て、言はずして行ふを要す、唯だ我日本は當に自己の天職如何と省覺す可きのみ、自己百年の運命如何と考慮す可きのみ、世界のルーマニヤと成ること勿くんば幸ひ也

○今日本は當に自己の天職如何と省覺す可きのみ、自己百年の運命如何と考慮す可きのみ、世界のルーマニヤと成ること勿くんば幸ひ也

○七月四日、大阪中の島小塚旅館を辭し去り、妻と共に堺市に赴く、是より先き去三十三年春、余塚の友人某々等並に技師大上某の請を容れ大阪に來り、大上連年思を草し力を殫して辛うじて好成绩を得るに至りたる煉炭製造の業を創するが爲め、砲兵工廠に請うて更に化學的試験を爲さんとす、余素より提理太田某と善きを以て、余爲めに幹旋の勞を取り、試験成績極めて良好にして同人皆大に喜び、其後堺市の町に於て事務所を設け、合名若くは合資の一會社を組織せんとす、是に至り大上等余に勸むるに、該事務所に於て疾を養ふことを以てす、余已に久しく小塚旅館に居り、稍や意に倦む有るを以て、直ちに堺人の勸に従ひ事務所に來れり、宅甚だ宏ならずと雖も、構築整然として庭園頗る觀る可く、大氣極めて清涼なり、唯此一事既に以て一切他事を贖うて餘有るに足る、況や主人大上、其他共に煉炭事業に従事して此に居る者、皆洒然無害の長者なるをや

○政友會、星死して落莫の感を免れず、然れども政友會の重なる部分を爲せる自由黨は、歴史占く地盤固く、且つ彼輩深くベンタムの利己學の實驗に得る所有りて、唯だ利祿はれ鬪りて、

復た人間產駒の事有るを知らず、故に今後とても決して分裂等の憂有る可らず、小波瀾は或は有る可し、小内訌は或は有る可し、各派の競争は或は有る可し、然ども政友會の力は正に其大政黨たる所の處に存して、分裂すれば雙方共に損有りて益無きが故に、所謂内訌もキハドき所に至れば自然に已みて、相共に利を鬪り書を避くることを是れ務めて、他念無かる可し、而して世の利益一方に志すの徒は、漸次に之に赴く可く、此處兎に角遽に衰滅に歸するに至らざる可し、但其内容を爲す所の人物は、大勳位を首とし他總務連中に至る迄、無氣力、無志概の人々なるを以て、唯だ蠢々然相薄感し、習々然歲月を空過して、既に國に益無く、亦大に己れに利するに至らずして、久しきを経て雲散霧消す可し、吁是れ政友會の運命也、夫れ或は周に繼ぐ者百世と雖も知る可き也、孔夫子我を東かす

○大勳位は誠に鬪々たる好才子也、其漢學は惡詩を作る丈けの資本有り、其洋學は目錄を語記する丈けの地下有り、是れ既に大に他の元老を凌轢して後に無語ならしむるに足る、加之口辯ありて一時を糊塗するに餘有り、然ども是れ要するに記室の才也翰林の能也、宰相者

の資に非ず、故に法律制度に關しては、前後常に若干の功有り、總理大臣と爲るに及では唯だ失敗有るのみにて一の成績無し、其器に非ざるを知る可し、故に侯の總理と爲りて企圖する所を觀るに、宛然下手の釣魚者也、船より竿より餌より絲より、百事具備するを待ちて始めて手を下すも、魚は一も得ること能はず、有名な行政刷新、財政整理、皆な下手の魚釣に非ずや、一言之を鬪すれば野心熾り有りて膽識足らず、内閣書記官長に止まらしめば、正に其所を得たらん也

○早稻田伯、壯快愛す可し、然れども亦宰相の材に非ず、目前の智に富みて後日の慮に乏し、故に百敗有りて一成無し、野に在て相場師たらしめば、正に其材を竭すことを得可し、蓋し糸平、阿部彦の雄はれのみ

○山縣は小點、松方は至愚、西郷は怯懦、餘の元老は筆を汗すに足る者莫し、伊藤以下皆死し去ること一日早ければ、一日國家の益と成る可し

○自由黨が其抑鬱困頓流離艱難の歴史を一棄して、自ら伊藤に敵て少しも貴重顧藉せず、而して伊藤とは何者ぞ、正に往年自由黨をして抑鬱困頓流離艱難せしめたる所の張本にして、

即ち當の敵たりしを思へば、我れ自由黨諸子の度量に服せざるを得ず、抑も男子の氣節を奈何、彼れ唯利是れ視る、故に爲さざる所無し、故に其度量は大盡の愚弄に忍ぶ期間の度量也

○進歩黨其無主義無經綸は自由黨に同じくして、而して面皮の厚きこと遠く及ばず、着々之が後に落つる所以也、自由黨先づ政府と提携して進歩黨之れに次ぐ、自由黨先づ積極を唱へて進歩黨之れに次ぐ、彼れ其衷情に愧づることを知る、故に遲疑して事に後る、其國家に益無きは則ち一也、其政俗に害有るは則ち一也

○自由黨其無主義無經綸を以て、殆ど自ら標榜して隠さず、其利祿を圖るが如きは、自ら夸耀して得たり、故に舊敵を恨みず新來を賤まらず、其能く公然大を成す所以也、其大を成すこと愈々甚しくして其風俗を傷ること愈々甚し、是れ久しからしむ可らず、伊藤侯、其區々の宣言書を以て自由黨を矯正せんと欲す、自ら搦らざるの甚しと謂ふ可し、今や侯全く自由黨の劃分と成り了れりと、思ふに能く今の自由黨を矯正して之を規儀に納るゝ者は、必ずや釋迦、孔子以上の人物也、今の計を爲すには、他に一の政黨を作りて、天下の人心を收攬し、天

下の義心を激揚し、其末や自由黨を擧げて之を排斥し、政界に尙せしめざるに在り、腐壞彼れの如く甚しきは、復た濟度す可らず

○進歩黨は猶恥有り、故に其無主義を恥ぢて主義有るを爲し、其利を圖るを恥ぢて義に仗るを爲す、統領其人を得ば或は眞の政黨を成すに至らん歟

○御靈文樂座の人形遣に富めること久し、目今吉田玉造の男役に於ける、桐竹紋十郎の女形に於ける俱に神品也、而して玉造の男は團十郎に似たる有り、紋十郎の女は菊五郎に似、秀調に似て大に之れに優る、其神旺し手馳せて最も得意の候に及びては、人形の外絶て遣手を見ざらしむ、人形即ち人也、役者也、吁嗟、技の神なる也

○玉造紋十郎は人形に於て、津太夫、越路太夫は淨瑠璃に於て、廣助、吉兵衛は三絃に於て、方に其神伎を賜す、所謂三絶也、文樂座狂言の天下に度越する所以也

○津太夫聲低くして、七八合目以外に在る觀客は恐らくは一語も聞ゆる無くして、唯唇頭の動くを見るのみ、態度の變轉するを見るのみ、然ども津太夫一たび場に現はるれば、滿座肅然として敢て譁譁する者無し、蓋し太夫意氣

精神を以て語りて、聽衆も亦意氣精神を以て聽く也、若し二三合目の處に居て仔細に傾聽するときは、其音節の微妙にして高尚なる、態度の自然に出でて少しも無理と當込みと無きこと、老練の極と謂ふ可く、彫琢して璞に歸るものと謂ふ可し

○越路音聲の美、曲調の巧、眞に匹儔無し、蓋し津太夫、呂太夫は、玉造の男形と相待ち、越路太夫は紋十郎の女形と相待ちて、俱に其妙を極むるを得、皆逸品也

○豊澤團平死して、絃界落莫たるを免れず、廣助吉兵衛皆體を具へて、而して微なる者にして、其下縱横歩行して涼を取る可く、大に須磨及び東海道中、平塚に似たる有り、海江一酒肆旅館を兼ねる者一力と云ふ、構架頗る宏壯、欄に倚りて一望すれば、水天髮髻の際、神戶及び淡路を看取するを得、余一夕妻と俱に歩いて海江に至る、遇ま天雨を催し、黒雲西方を蔽ひ、波浪岸を拍ち、鞞鞞の聲、人をして或は意氣壯らしめ、或は悽然哀を催さしむ、余既に不治の疾を獲て所謂一年半の宣告を受けて、而して妻日夜余に侍して藥餌の勞を取るも、是れ固より治癒を求むるに非ずして、唯死期を待